

『子供を祝福するイエス様』

聖書 マルコによる福音書 10章 13～16節 讃美歌 351 493 507 484 24

説教 森田幸男牧師

私たちの大阪北教会では、11月の第三日曜日は親子合同礼拝をして、そして幼児の祝福式を行う、そういうならわしであります。その機会にはいつも只今読んでいただきましたマルコによる福音書の10章13節から16節の聖書を読むことが多いのでありますけれども、今日もこの聖書を通して共に神様の祝福にあずかりたいと思います。

当時、ユダヤの国では、子供たちを、ラビ、つまり聖書の教える先生ということですが、ラビのもとに連れて行って祝福を受ける、そういうことが習慣であったと言われます。特に最初の誕生日にはそれを欠かすことはなかったと言われていました。

そのようなある村にイエス様がやって来られた。そしてイエス様の名声は子供から大人まで広く知れ渡っておりまして。そして恐らく人々の中には、“神様がこの人の中に宿っておられる”、そのような印象を持つ人が多かったのだと思います。そこで人々は誕生を迎えた子供、そのお兄ちゃん、お姉ちゃんたちをイエス様のところに連れて来たのであります。

今申しましたように、当時のラビは、律法学者は聖書を通して神様を人々に伝え、そしてその教えを教える者という立場でありましたけれども、そのような神の教えをよく知る人を通して神様の祝福をいただく、そういう点ではラビは神と子供たちの仲立ちをする立場にありました。

そのように神様と人の仲立ちをする者に、また祭司がおりました。特に、「祭司」と言う言葉は、「橋渡しをする人」という意味もあるわけでありまして。神様と人との橋渡しをする、これが祭司の務めでありました。

私たちは宗教改革以来の新教プロテスタントに属する、その中でも改革派の教会ということでもありますけれども、「宗教改革の標語」とこういふふうには、皆さんは何を思い浮かべられるでしょうか。「宗教改革のモットー」と言ってもいいと思いますけれども、それはローマ教会に対しては、「聖書のみ」、そういうふうには聖書を神の言葉として何よりも重んじるというのが、新教プロテスタントの立場です。そしてその聖書の教えは、「恵みのみ」、つまり私たちが神の祝福、その救いにあずかるのは、神の恩寵、恵みによるのであって、私たちの行いによるのではない。そのことを信じて、私たちは義とされるのだということで、それを「信仰のみ」「信仰義認」と言います。ひっくり返して、「キリストのみ」と言っています。

それらに加え、「万人祭司」というモットーというか、標語があります。つまり「万人」というのは、我々が言う牧師、長老も執事も、そして教会員のすべて、一人一人が祭司であるということです。つまり、聖職者と言うか、教職のみが祭司である。或いは伝道者であるというのではなくて、キリストの救いにあずかったすべての者が祭司である。こういう聖書の教えに立ったわけでありまして。ですから私たち一人一人が神様と人との橋渡しをする。そういう尊い務めを我々皆が受けているのだということ、を、「万人祭司」と言ったわ

けであります。

ですから今日のところでは、イエス様が神と子供たちの橋渡しをする人でありましたけれども、私たち一人一人も、ただ子供たちばかりかすべての人に対して祭司の務めをする。つまり、人が、“ああ、この人の内に、神の恵みが宿っている。本当に神様がこの人の内に生きて働いておられる”ということを感じる。そういう信仰生活に私たち一人一人が生きる。そういう尊い務め、かけがえのない務めを私たちは与えられているということになります。

そのようなことで、人々が子供たちをイエス様に触れていただくために、祝福を頂くために連れて来ました。ところが弟子たちはこの人々を叱ったと、このように書かれています。するとそのあと、「しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。」そして次のおっしゃったわけでもあります。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

弟子たちはこの人々、親たちと子供たちを見て叱った。イエス様を通して神様の祝福をいただくとして喜び勇んでやって来た者たちを、弟子たちは叱ったのであります。

これはもう何度も見ていることでありますから、事情は私たちもそれなりに分かるのであります。今日は10章の13節以下を読んでいますけれども、聖書を一枚繰って頂いて、次の頁のその次、11章にいきますと、“エルサレムに迎えられる”とあり、これはいわゆる受難週に入るということです。ですからもう本当に数日後なのか、何週間後なのか、一枚でも、2、3行でも「それから十年後に」という一語が入っていれば、一挙に十年後ということになりますけれども、今日の箇所の前後を見ますと、イエス様は再三、自分は十字架につけられて、そして三日の後に復活すること、いわゆる「死と復活の予告」をされておられます。

弟子達は弟子たちなりの受け止め方がありましたけれども、いずれにしてもそのような時がそこに迫っていることを、イエス様も弟子たちも感じていたということでもあります。ひしひしとその時が迫っていることをイエス様も弟子たちも感じていたわけでもあります。そういう状況ですから、“今はあなたがたの相手をしている余裕がない”というふうなことを、弟子たちはその態度で示したのだと思います。

そして、もしイエス様も弟子たちの言葉を入れて、そのまま其処を通り過ぎられたとしたならば、この時、この弟子とイエス様に会った子供達は、イエス様に対してどういう印象を持ったでしょうか。この親たちにしても、子供たちにしても、これが生前のイエス様に会った最後の機会と結果的になったわけですね。イエス様も弟子たちに同調して、この子供たちを其処において通り過ぎて行ってしまわれたとしたら、“ああ、イエス様も人並みの人、こういう大変な時は、我々のことをかまってくださらない、そういう人”としてこの幼児たちの心に、そういうイエス像が刻まれることになったと思います。

ところがイエス様は、この人々を叱る弟子たちを見て、その弟子たちに対して憤られたと、このようにあります。これはこの言葉自体も非常に強いわけですが、「イエス様が憤られた」と言う言葉が文字通り使われている箇所は聖書ではここしかないのです。この言葉は多様な含みがあります。不快に思うとか、不満に思うとか、悲しむとか、そして腹を立てる、そして憤るといふうちに、意味がずっと深まっていく。そういう言葉なんで

すね。これは発酵させるものがありますね、そういう発酵するものが熟成されて泡立つ、そういう言葉なんですね。

イエス様が憤られた。これには人々も子供たちもびっくりしたと思うのです。そしてその後、イエス様は弟子たちにおっしゃったわけです。「供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」

「神の国はこのような者たちのものである」というこの言葉の意味は、いろいろに読み取ることができますけれども、「神の国」というのは、このような者たち、この親たち、また子供たちも含めてですけれども、イエス様を通して神様の祝福を受ける。ひたすらそういうことを素直に求める者たちと、そういうふうに言っているかと思いますが、またそれをイエス様は言い換えられて、「子供たちのように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」この言葉は弟子たちに言われているのですね。ということは、先ほど来申しますように、何度もイエス様は十字架の死と、三日目の甦りということを言われているのですけれども、それをおっしゃるとその後、弟子たちはどう反応したかということがずっと書かれております。

まず最初の“死と復活の予告”がなされたのは、8章の31節以下であります。“イエス、死と復活を予告する”とあります。そうしますと、それを聞いたペトロは弟子を代表して、イエス様をいさめたと書いています。「とんでもありません」ということですね。そうすると、33節、「イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。『サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。』」こういうふうになっておられます。ここでもイエス様は叱って、そして言われている言葉は、これはきついですね。「サタン、引き下がれ。」

次は9章の30節のところに、“再び自分の死と復活を予告する”とあります。すると32節に、「弟子たちはこの言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった。」一度目ならば聞いて皆解釈をして、“そんなことはとんでもないです”というふうなことでしたけれど、また言われたので彼らは怖くて、尋ねられなかった。けれども弟子の中で一番偉い者はだれかと、そういう話とその直後に続いています。

33節を見ますと、「一行はカファルナウムに来た。家に着いてから、イエスは弟子たちに、『途中で何を議論していたのか』とお尋ねになった。」彼らが一生懸命に何かやり合っているのは感じておられたのです。「『何を議論していたのか』とお尋ねになった。彼らは黙っていた。途中でだれが一番偉いかと議論し合っていたからである。イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。（“よく聞きなさい”ということだと思うのです。）『いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。』そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。『わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。』」このようにおっしゃって、イエス様は、わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのだ。そしてそれは、わたしではなくて、わたしを遣わされた方・神を受け入れるということにもつながるのだ。だから一人の子供に対するその態度如何によって、その人がイエス様を、神様を、どう理解しているかということがもるに出て来ると、こういうことになります。

こういうことがありまして、そして今日の箇所があるのです。そして三度目の予告というのが82頁にあるのですけれども、三度目の予告がありますと、そのあと今度は何が出来るかという、「ヤコブとヨハネの願い」というのであって、まあこれは二番弟子、三番弟子と言ったらいいでしょうか。兄弟ですけれども、イエス様にお願いした。「イエス様が栄光をお受けになるとき、(言い換えれば成功したらとでも言ったらいいでしょうか。イエス様が成功してその地位にお着きになったら、)わたしどもをその右と左に置いてください」と、こういうふうに願い出たということでありまして、イエス様がご自分の死と復活を言われた後、弟子たちは「とんでもない」と言うし、「だれが一番偉いか」と言うし、「私たちを右と左に置いてください」ということで、そこにはイエス様の思いと弟子たちの受け止めには大きな開きがある。

そして今日の箇所に来ると、子供たちがイエス様から祝福をいただくと思って来たら、弟子たちは叱ったけれども、その弟子たちに対してイエス様は憤られた。そしてその後、「子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された」というふうにあります。“これでよかった”とわたしは思います。もし、イエス様が弟子たちに同調されてそこを通り過ぎられたら、その時そこにいた子供たちがその後成長して、「イエス様は本当に私たちの救い主なんだ。いかなる犠牲も惜しまれなかった本当に神の子で、愛の人だったのだ」と、どんなに人々が一生懸命にその子供たちに信じさせようとしても、子供達は受け入れようとはしなかったと、わたしは思うのです。あの時、イエス様は私たちが行ったのに、私たちを置き去りにして、通り過ぎて行かれた。あんな人が「愛の人」であるはずがない。あんな人が「救い主」であるはずがない。そういうよく言う、トラウマというか、イエス様とその弟子に対する不信というものが、もしこの時通り過ぎて行かれていたら、子供たちの魂に刻みこまれたと思います。

そういう意味において、諺に、“三つ子のたましい百まで”と言います。これは小さい時の性格というのは、大きくなっても変わらないということを使うわけですが、これは本当にそうだと思います。性格は変わりません。小さい時やんちゃだった者は、大きくなってもやんちゃのまんま、気の短い人は気の短いまま、おっとりした人はおっとりしたままで、性格は変わらないと思います。けれどもそういう私たちが、本当にイエス様を受け入れた時に、そのそれぞれの性格がその人の個性になって、愛において良いように働くように、その性格が生かされることになると思います。ですから、あまり心配しないで、マイペースでいったらいいと思うのです。今まで積み重ねてきたものは急には変えられません。人の性格は変わらないと思います。

大事なことは、イエス様の祝福を自分の中に頂くこと。そうすれば私たちも祭司になれると思うのです。神様と人々の橋渡しになって、神様の祝福を自分なりの仕方でも人に届けることができる、証することができる。そういう者に変えられて行くと思います。

いずれにしても、私たちが幼少の者たちに、その幼児期に本当にイエス様を伝える。そして聖書に触れる機会を持たせる。誰であったか、思い出せないのですが、こんなことを言っています。「その人の幼少期に一番深遠な思想を教えるべき。それが最後にその人を救うことになり得ます」と。これは有名な人の言葉なんですけれども、きっとそれはその人の体験に基づいていると思います。最初は聖書のことを聞いたり、復活だとか、奇跡だとか言っても、子供でも笑うかもしれません。けれども、死んで甦るのです。死で終わ

るではありません。死んで甦り、永遠の命と幸いにあずかるのですということ、先ず何よりも子供たちに教え、聞かせておく。そしてそれを自らが生きて行く。

勿論、救いにはいろんなレベルであるのです。いろんな宗教で救われるということもあるのです。本当に閉じこもっていたあるおばあさんが、立正佼成会のある婦人と出会って、その引きこもりから外へ連れ出されて、その婦人の腰巾着のように付いて回って、「自分は初めて救われました」という証をしているという本を読んだことがあります。私は非常に感動を覚えました。その人はいつも雨戸を閉めていましたから、子供たちが学校の行き帰りに通る度に、「くそばばあっ」「気違いばばあっ」と言って、石を投げたらしいのです。それがある日、そのおばあさんのお宅に一人の婦人が訪ねて来て、「さん、おられますか」と、やさしい声で本名を呼んでもらった。その婦人は近所の人を訪ねて来たのだけでも留守だったので、ひょっとしたらその留守の事情をこのおばあさんが知っているかもしれないと思って訪ねて来たのでした。おばあさんがその声の優しさに惹かれて出て行ったら、その人が立正佼成会の人だったというわけです。それがきっかけで、こんなやさしい声で自分の名を呼んでくれる人に初めて出会ったような経験で、それが入信のきっかけになったということなのです。それはその人にとって、その段階での救いでありました。

だからいろんな思想とか諸宗教、新興宗教に人が集まるのは、それなりのわけがあると思うのです。一定のご利益があるのです。

けれども、人はやはり死ぬわけなのです。そして思いがけない試練にぶつかるのであります。それが人の人生ですね。そのような時に、そのような宗教や信心ではもう間にあわない。そういうような時に、そういう試練の中で本当に私たちにとって救いになるものは何なのか。それがイエス様が繰り返し、繰り返し弟子たちに言われ、そして正にそのように死なれ、甦られた、その死と復活の事実が、結局われわれを究極的に救い、支えてくださるのです。

ですから私たちは子供たちにも、大人の人たちにも、友人、知人にも、今私たちがいただいているキリストによる救いと祝福、幸いを伝えたいと思います。

勿論私たちはその究極の救いというか、そこに至るまでにいろんな試練にぶつかって、本当に現実的な助けがほしいというふうなことはいくらかあるわけですね。そんな時でも、究極の救いがあるのだからと捨て置いてもかまわない。わたしにはそんな感じもあるのですけれども、今日の箇所を見ていると、「今忙しいから、あなたたちの言うことを聞いてはおれない」と、イエス様はおっしゃらなかったのです。祝福を求めるその親たち、子供たちを、弟子たちの妨害を退けて、その祝福のすべてを注がれたわけでありました。

今日の午後の講演でも話すことになるのですけれども、わたしはもし今、旧約聖書、新約聖書の中から代表的な箇所を一つずつ挙げるとすれば、今ならば旧約聖書から「ヨナ書」を出します。そして新約聖書からは「ザアカイ物語」を出します。だからこの箇所によって、絵も良ければ説明も良い紙芝居を作って、それを子供たちにちゃんと見せておく。そうすると、どんな試練の中にあっても、そういうものが心に入った人は、苦しむだろうけれども、絶望の底に落ちるだろうけれども、それでも自分は捨てられていないということ、身をヨナに託し、ザアカイに託し、神の助けを求めて、本当にその救いを受けることができると思います。イエス・キリストは、イエス・キリストにおける神は、本当に小さい者、その者を、あるがままに全面的に受け入れてくださるのです。

弟子たちもこの時は訳がわからなくて、結局イエス様を知らないとか、何だかんだ言ってますけれども、でもイエス様は三度イエス様を否認したペトロに対しても、「あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。だから、あなたが立ち直ったら、他の人々を励ましてあげなさい」と、生前おっしゃっています。信仰も何もかも失って、どん底に落ちる。けれども、あなたの信仰がなくならないように、私は祈った。だからあなたは立ち直ります。そうしたら、皆を励ましてあげてくださいという言葉がイエス様はおっしゃって、それによってペトロは再起できたとわたしは思うのですね。

今日の中にもイエス様その方がおられるわけですが、「わたしの名によってこの子を受け入れる者は、わたしを受け入れるのだ。」「イエス様の名」と聞いた時に、私たちは何を思い起こすでしょうか。「イエス様」と言ったらどういう方か。それは価値なき者、反価値の罪人を拒否されない。否、むしろ、そういう者をそのまま受け入れてくださる方、それがイエス・キリストという名を持たれる方ではないでしょうか。そういうイエス様の姿が今日の箇所にありますし、私はここを読んでいてルカによる福音書の23章を思い出しました。イエス様は十字架に付けられました。その右左にも二人、犯罪人が十字架に付けられました。その犯罪人の一人が、「イエス様、あなたが御国の権威を持っておいでになる時には、どうかわたしを思い出してください」とこういうふうに願いました。すると、イエス様は、「あなたは今日わたしと一緒にパラダイス・樂園にいる」とおっしゃいました。

このイエス様の姿を見ている、今日の箇所のイエス様とわたしの中では重なるのですけれども、“今そんな子供の相手なんかしておれない。それどころではないのだ。生きるか死ぬかというそういう瀬戸際なんだ”と弟子たちは思いました。実際そうだったわけですが、イエス様は子供たちを受け入れてくださいました。そしてご自分は十字架に架かられていて、その隣の犯罪者が、「わたしを覚えていてください」と言ったら、「もう今は苦しくて、そんな相手はしてられない」とはおっしゃらなかったのです。そして、「あなたは今日、わたしと一緒にパラダイスにいる」と、応じられたのでした。

私たちの神は、主イエス・キリストは、どんな時であっても、私たちの求めには本当に全存在をあげて応えてくださる。それが今日の箇所にも見ることができる。十字架の上の姿にも見ることができる。そしてイエス様の生涯を貫いていた、イエス様その人というのは、そういう方だと思います。

子供たちにもこのイエス様を伝え、そして私たちも一層イエス様を迎え入れて、その祝福と愛にあずかって、そして私たちも万人祭司のはしくれになってこの祝福を蒔き、これを広げていきたいと思えます。

お祈りいたします。

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。

あなたは私たちがあなたを求める先に、私たちを心に留め、選び、そして絶えることなく溢れる祝福と顧みの中において、今日この日まで導いてくださいました。今そのことを新たに覚えて感謝いたします。

今教会に集まっている子供たち、そしてまた私たちもいよいよあなたの溢れる祝福を受けて、それを感謝して生き、そしてまた人々にもそれを分かち事ができるように導いてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン